

Title	モンテーニュの思索の歩み : 『エッセー』の構造とその論理に見る : (その九)
Author(s)	竹田, 英尚
Citation	Gallia. 1977, 16, p. 12-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6124
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

モンテーニュの思索の歩み

— 『エッセー』の構造とその論理に見る—

— (その九) —

竹 田 英 尚

第二章 個性の開花¹

(2) 章の構成

『エッセー』は第一巻が57の章,そして第二巻が37の章に分けられている。作者モンテーニュは何か作意を凝らしてこれらの章を構成したのであろうか。作意の形跡が認められるならば,それはどのような意識の表現であるか。あるいは作意が存在しないとすれば,それはどのような理由によるものであろうか。これが『エッセー』の章の構成の問題である。

もしモンテーニュが章の構成に趣向を凝らしたとするならば,「回帰の構成」がそれに当たるであろう。つまりモンテーニュは主題から逸れて紆余曲折に富む随想を展開した時でも,最後には一番最初的话题に帰って章を結ぶのである。途中の脈絡がいかに錯綜してようと,こうして章の冒頭と末尾が照応し,巡り帰る円環が形成されるのである。同じ主題が一貫して脱線の少ない章はもちろんこの「回帰の構成」の対象外になる。執筆年代が1577—80年期に推定される22の章のうち,話題が変化に富んで,随想の展開に曲折の多い7つの章はすべて「回帰の構成」になっている。モンテーニュのこの趣向は,随想をつなぐ彼の言葉から察することもできる。たとえばモンテーニュは章の末尾で,「私の初めの問題に一言つけ加えるならば」²とか「さて,ふたたび話を初めに戻すと」³のような断り書きを差し挟みつつ,突然章の冒頭の話に帰ることがある。このように以前の脈絡にこだわらず好きな所へ自由に飛び帰る展開は,彼の随想法に矛盾するものではなく,その一環にすぎないのであるが,⁴章の末尾で冒頭を意識した関連のつけ方に彼の意図の存在を推測できるわけである。章の冒頭と末尾を結びあわせようとする構成の作意を想像できるのである。この程度の構成ならばモンテーニュも決して煩わしく思ったりしなかったであろう。彼の自由奔放な随想は全然拘束されないのである。モンテーニュの随想の姿勢が次のような性質のものであったとしても,

私は運命以外に,私の持ち駒の部署をきめる参謀をもたない。私は,夢想が思い浮か

ぶままに、それらを積み重ねる。¹⁵

章の最後に彼の随想法の一つを適用すれば、簡単に「回帰の構成」を作ることができるのである。

ではこの構成はどのように理解すべきなのであろうか。『エッセー』の中で『エッセー』を語ることが好きなモンテーニュもこの構成については何の説明も示唆も与えていない。私達自身でその意味を推察するしかない。「回帰の構成」によって章の冒頭と末尾が結びあわせられると、そこに一つの円環が形成され、小世界が出来上がる。こうして自由奔放な随想の動きに統一的な秩序が生まれる。しかもこれは決して静的な秩序ではない。モンテーニュにとって世界も人間も認識の対象はすべて有為転変の中にあるように、彼の認識の手段である『エッセー』も決して静的な秩序の獲得を目指してはいない。静的な秩序とは各々が確乎不動の定まった位置をもった体系であり、この完全性は憧憬としてはあり得ても、現実には逆にすべては常住のない「不定性」を特徴としている。不動の位置を定める図式的な構成に認識の対象を収めることはできない。円環によって出来上がる小世界の姿が、絶え間ない運動の中にある物の有しうる唯一の秩序であらう。「回帰の構成」がモンテーニュの世界観や随想法に抵触しない唯一の構成らしきものであったことは納得できる。

さらにこの構成の円環という特徴はモンテーニュの時代の思想とつながっている。この世界の被造物はすべて変転の宿命にあるという世界観の裏には、静止を理想とする神話があり、永遠の不動性こそ完全の特性であり、運動は不完全の属性であると見做す思想があった。そして円運動は始めも終わりもなく、静止に最も近い故に、最も完全に近いと考えられていた。章という小世界を円環に仕上げる「回帰の構成」はこのような同時代人の意識の表現の一つかも知れないのである。

しかしながら「回帰の構成」がはたして十分円環の形を実現しているかどうか、疑問が残ることは断わっておかねばならない。ただ章の末尾を冒頭に連結すれば、その最も広い意味においては円環を形成することになるのであろうか。章の末尾だけではなく、途中の展開にも心を配って、モンテーニュが「回帰の構成」に苦心している形跡はない。一章全体の随想が円運動に喩えられる動きを宿しているわけではない。「回帰の構成」は途中の随想まで支配する性質のものではない。モンテーニュが話題を最初に帰す仕方はしばしば非常に唐突であり、以前の随想の流れなぞ考慮に入れていないようである。随想の展開が紆余曲折に富む章に「回帰の構成」が認められるのは事実であるが、私達はこの構成が円運動の神話の表現であると断定することにはまだためらいを感じる。この点に関してはさらに研究と検討が必要であらう。純粋な仮定としてここに記すに留めたい。

『エッセー』の章には結局「回帰の構成」以外に構成らしき構成はない。一つの章を個別に分析して構成を指摘し、その意味を解釈したとしても、その構成は、短い章ならば、実際はモンテーニュの思考法の一形式なのである。選んだ一章が短い随想であったために、彼の思考法の一形式が章全体の姿と重なり、作品の構成のように見えるにすぎないのである。

従って作者の作意の存在しない所で作品の趣向を論じることになる。作者の意志を越えた作品の構造と作者の意図的な趣向である構成を混同することは避けるべきであろう。長い章についてもほぼ同様のことが言える。一章の随想の展開を支えている、いくつかの基本的な随想法のうちの一つを全体に押し広げて強調し、章の構成を発見したと思いつく危険がある。もちろん章の構成と思考法やその延長である随想法とは密接な関係にある。しかし両者を区別しなければモンテーニュの作品に対する態度を正確に理解することはできない。作品の構造から思考法や随想法を把握したのちに初めて、章を構成するモンテーニュの作意を判別することができるのである。従って恣意的な分析が主張する構成ならば、『エッセー』全章における思考法と随想法の研究にもとづいて簡単に論駁できるであろう。このように構成と構造を厳密に区別する観点に立つならば、『エッセー』の章には「回帰の構成」以外にモンテーニュが作品を意識した趣向は認められない。結局『エッセー』の章にはほとんど構成は存在しないと言って良いであろう。

章の構成が存在しないことの証明には厄介な点がある。なぜならば存在しないという証明は、存在すると主張された構成を反論する時に具体的な説得力をもつからである。構成が存在しないことの説明は多かれ少なかれ傍証的な性格の論になるであろう。しかしその説明には事欠かない。異なった側面から数多く挙げることができる。前節第二章の(1)で指摘した随想法や本稿の註番号(5)のようなモンテーニュ自身の言葉と照らしあわせて考えてみるのもその一つである。モンテーニュの随想の姿勢は、何らかの作意で一章全体を構成するのには甚だ不向きなのである。しかし一方傍証と言っても、前節の随想法のように、論拠にする事実を論証するためにさらに一節を要するという広がりの中にある。本稿では二、三の簡単な傍証の所在を指摘するだけに終らざるを得ない。

章の構成にこだわるべきではない一つの理由は、『エッセー』では必ずしも一章一章が独立な作品であるとは言えないことである。一つの章は、短い数章に分けたり、他の章とあわせて長い章を作ったりすることを許さないほど、完結性や独立性があるわけではない。モンテーニュにとって章は便宜上の仮の区分であつたらしい節が見られるのである。たとえば第一巻第四十章は「これらの二組の比較においては、さらにもう一つの特色がある」という言葉で始まっているように、この章の随想の発端は前章の中にある。第四十章は、第三十九章と切り離すならば、すでに書き起こしから論点の所在が曖昧になる。モンテーニュが何かの理由で第四十章の随想を現在の位置に置くために、冒頭に言葉を書き加えて第四十章を作ったと仮定してみることはできよう。しかしながら章の中ほどにも「この別の二人の哲学者の中にもいくらか似た点がある」という言葉があり、第三十九章にしか名前の上がない哲学者を指している。やはり第四十章の随想は第三十九章に依存しているのである。二つの章は内容も似通っており、元はひと続きの随想であったとしても不思議ではない。第四十章は前章の後半で「これらの二組」の思想を引き合いにして「孤独について」考えている時に派生して来た随想であろう。モンテーニュは退官生活の支柱

である孤独の思想について明瞭な一章を設けるために、第四十章の随想を切り離したのかも知れない。あるいは執筆年代から原因を想像することもできよう。ヴィレーによれば、この二章の執筆年代を決定する確証はないが、1572年頃の執筆第一期と推測できる節もあると言う。もし執筆第一期に書かれた随想であるならば、モンテーニュは同期の短い章にあわせて二つの章に分けたとも考えられる。しかしいずれにしろ、これらの二つの章について、独立的な一章のような、作意を凝らした構成を主張することは妥当ではないのである。

1577-80年の執筆第二期に書かれたことが明らかな章にも同じような形跡が残っている。第二巻の第十六章、第十七章、第十八章は、書き出しの文章から、一連の随想であることがわかる。第十七章は「もう一つ別の虚栄がある」、第十八章は「なるほど人は私に言うかも知れない。自己を主題にして書くというこの企ては……」のように、それぞれ前章との関連で随想が始まっている。内容から見てもこれら三つの章に連続した発展を認めることができる。モンテーニュはもともとひと続きであった随想をほかの章に似合った長さに区切って三つの章を作ったのであろうか。第三巻も書き終った晩年のモンテーニュが加筆した言葉が章の切り方についてのべている唯一の証言である。彼はそこで次のように説明している。

私が初めにしたようにあまりに何度も章を刻むと、読者の注意をそれが生まれる先に断ち切るように思われたし、また、読者がこんな些細なことに集中することをばからしいと思って注意を消散させてしまいそうに思われたので、私は章をもっと長くすることを始めた。しかしそれには読者の側にも固い決心と特別の暇が要求される。こういう仕事においては、著者にただの一時間も割いてやれないというのでは、何も与えてやらないのと同じだ。また、何か別のことをしながらでなければ、著者のためにしてやれないというのでは、何もしてやらないのと同じだ。⁶

このような言葉と先の二つの形跡から考えると、すでに書き終った随想をあとから章分けしたことも何度かあったに違いない。必ずしも現在の一章一章を個々に書いたわけではないであろう。章などにかかわりなく随想を書き留め、作品として『エッセー』を出版する際に章に分けたことも確かにあったに違いない。先に見た二つの例はモンテーニュが「初め」の頃「何度も章を刻」んだ跡なのであろう。

モンテーニュが章の構成に拘泥しない一つの理由は、モンテーニュ流の随想では各部分の独立性が強いからである。そのため部分部分の従属関係を定めて構成を組み立てる必要もなく、接続も切断も容易なのである。執筆第一期の短い章では私達はモンテーニュの思考法が作る構成を指摘することができた。しかし執筆第二期に章が長くなってくると、一章とモンテーニュの随想の区切りはしばしば一致しなくなる。一体をなす随想が一章を作るのではなく、モンテーニュの随想の単位は実際はもっと短いのである。一つの章はこのような部分の統一ではなく、ただの連結にすぎないのである。

私が脱線したのはこのことを狩猟について言うためであった。ここにあるのは支離滅裂な断片の寄せ集めなのである。そこで私のことに話を戻すと、私は他人の苦痛にはすぐに同情する性だから、もしも私がどんな場合にも泣けるのだったら、たやすくもらい泣きするところである……⁷⁾

モンテーニュが自由に脱線することができるのは、『エッセー』が「支離滅裂な断片の寄せ集め」(《un fagotage de pieces descousues》)になることを意に介さないからである。彼は章の秩序のために脱線部を切り捨てたりはしない。章の統一よりも狩猟について考えた「断片」の価値を選ぶのである。「断片」は前後の脈絡に依存しない、それ自体の存在理由をもっていると言えよう。上の言葉はただ脱線したあとの弁解にすぎないのではない。「断片」を単位とする随想の姿勢の表われなのである。たとえば次のような、その積極的な弁明がある。

私の好む話し方は、単純、素朴で、紙に書いても、話しても同じ話し方であり、豊かで、力強く、簡潔で、無駄のない話し方です。冗長なのよりはむしろごつごつした話し方であり、いささかも気取りや技巧がなく自由奔放で、大胆な (《desreglé, descousu et hardi》) 話し方です。一片、一片がそれぞれに一体をなして、先生じみたり、修道士じみたりせずに、むしろスエトニウスがユリウス・カエサルの文章をそう呼んだように、「軍人らしい」話し方を好みます。私は継ぎ目や縫い目が現われて見える織物を好みません。ちょうど美しい肉体において骨や血管が数えられるようであってはならないのと同じです。⁹⁾

先に「支離滅裂」と訳した《descousu》という語は、自己の随想を卑下した形容ではなく、その逆説的な肯定なのである。《descousu》とは「気取りや技巧」の拒否であり、「一片、一片がそれぞれに一体をなす」という原理にもとづいている。ところで「一片、一片がそれぞれに一体をなす」随想は、「継ぎ目や縫い目」の目立つ作品になりはしないだろうか。「継ぎ目や縫い目が現われて見える織物」を好まないと言っていることと一見矛盾しているように思われる。しかしモンテーニュから見れば、一片一片を論理的な関係や配列に泥んで組み立てる「気取りや技巧」が、「骨や血管が数えられる」作品を作るのである。逆に日常話すのと同じような、素朴で大胆な随想こそ、「美しい肉体」のような生命体に近い。論理が意識の流動的な持続を分断しないが故に、一片一片が一体をなして、しかも「継ぎ目や縫い目」の见えない展開が生まれるのである。従ってモンテーニュは「断片」を関係づける論理性には頓着しない。彼の随想には独立的な一片一片をさらに統一する論理的な構想などは存在しない。一片一片をつなぐ脈絡は非個性的な論理ではなく、意識の流れという人格的な性質を帯びてくる。そこで「一片、一片がそれぞれに一体をなす」という随想の姿勢は、『エッセー』という作品と自己自身との同一性を欲するモンテーニュの感情、すなわち自己描写の感情に通じるのである。¹⁰⁾

モンテーニュの随想の、「一片、一片がそれぞれに一体をなす」という原理は、『エッセー』

を書くことは世界を認識する行為でもある以上当然彼の世界観とつながっている。一片一片が「支離滅裂な断片」になることを恐れず、それらを論理的に関係づけ、組み立てる結構を軽視する裏には、モンテーニュの認識観が潜んでいる。理性は経験的な事実以外に拠り所のないことをモンテーニュは自覚している。しかしながら現実の「出来事は多種多様で、あらゆる形において無限の実例を示す」¹¹⁾ 従ってモンテーニュは多種多様な事実を個々に検討することに甘んじる。対象の無数の様相を一つ一つ判別し、理解することを自己の責務とする。さらにその上に各々の考察の結果を関係づけ、総合して、全体的な知識を獲得することなぞ、モンテーニュには人間の能力を越えた業に思えるのである。モンテーニュの思索の実践的原理である「エッセー」は、眼前の一事象の個々の側面を判断する個別的な考察であり、関係の論理によって判断体系を構築する動きは含んでいない。もしも関係の論理が一章全体にわたる随想の展開を統べていたならば、あれほどわずかな訂正で、あれほど多くの加筆を『エッセー』は許さなかったであろう。モンテーニュが自由に加筆することができたのは、『エッセー』の随想には「一片、一片がそれぞれに一体をなす」独立性があり、「エッセー」という思索がもともと一章全体を構築するような論理を欠いていたからである。「エッセー」という原理を墨守すれば、思索の発展につれて『エッセー』は増々世界の「多様性」を反映するのである。

結局モンテーニュが「エッセー」によって獲得する認識は、多種多様で、それぞれ無数の様相を見せる経験的事実の性格を離脱することなく、「支離滅裂な断片」のまま『エッセー』に書き並べられてゆく。モンテーニュはそれ以上を望まないし、また彼にとってはそれだけですでに大変な仕事だったのである。モンテーニュの世代は、ルネッサンス初期の人達が熱狂的に新しい世界を開拓したあと、批判を待っている「無限の実例」を目にしたのである。人間性の輝く新鮮な事実は貴重な教訓を宿しているはずであった。すべてがまだ発酵状態にある世界はその「多様性」によって人間の思考を圧倒するように思われた。しかしスコラ哲学の普遍的な思考の空虚さを体験したのち、経験を理性の根拠にして再出発しようとする自覚がすでに生まれていた。ルネッサンス初期の人達が広がった地平を涉猟し、収集した事実を継承して、経験的事実の宿す意味を批判的に検討することがモンテーニュの世代の責務であったと言えよう。モンテーニュは「無限の実例」の「多様性」に果敢に向ってゆく。しかし彼が事実の意味をただ個々に考察することに甘んじ、彼の思索には得た意味を統一すべき体系を構想する発展がなかったとしても無理からぬことであろう。それは彼の次の世代の責務なのである。

註

- 1) モンテーニュが1580年に『エッセー』を刊行するまでの著作活動は二つの時期に分けられる。1572年から73年が最初の執筆期であり、およそ1577年から80年までが執筆第二期に当たる。拙稿では第一章は前者の時期に書かれた章が、第二章は後者の執筆期の章が論考の対象である。尚（その一）から（その六）までは天理大学学報に、（その七）、（その八）、（その十）は追手門学院大学文学部紀要に掲載。
- 2) II—XVI, p.427, p.24. 前者は1580年出版の『エッセー』（Essais de Messire Michel Seignevr de Montaigne, livre premier et second. A Bovrdeavs. Par S. Millanges Imprimeur ordinaire du Roy. M. D. LXXX.）のページ数、後者は訳を拝借している、原二郎氏訳『エッセー』（筑摩書房世界文学体系）のページ数である。但し訳文は原氏の訳を基礎にしながら1580年版にあわせて修正を加えている。以下同様。
- 3) II—XXXIII, p.553, p.96.
- 4) 拙稿第二章の（1）表現法の個性（追手門学院大学創立十周年記念論集）参照。
- 5) II—X, p.97—p.98, p.294.
- 6) III—IX, p.995, p.300. 尚1580年版にない部分では、前者のページ数は、Les Essais de Michel de Montaigne, édition par Pierre Villey, réimprimée sous la direction et avec une préface de V.-L. Saulnier (P. U. F.)による。
- 7) II—XI, p.140, p.311.
- 8) 同じような言葉が別の意味を込めて使われている箇所がある。
このいろんな断片の寄せ集めは、私が何もすることがなくて退屈すぎるときにだけ書き、しかも家以外の場所では書かないというふうにしてできたものである。だから、さまざまの中止や中絶から成り立っている。いろんな機会がときには何か月も私をよそに引き留めたからだ。それに私は最初の思想を第二の思想で訂正することをけっしてしない。私は自分の考えの推移を示したいのだ。そして各部分を生まれたままの姿で見てもらいたいのだ。これをもっと早くから始めていて、私の考えの変化の推移を見分けることができれば面白かったと思う。（II—XXXVII, p.595, p.114.）
つまり『エッセー』は脈絡のない「断片」というだけではなく、時間的な中断のある「いろんな断片の寄せ集め」（《ce fagotage de tant de diverses pieces》）でもある。そしてそれはモンテーニュが「各部分を生まれたままの姿で見てもらいたい」からであり、『エッセー』に「考えの変化の推移」を写したいからである。従って『エッセー』における自己描写という角度から、「断片」の問題を考えることもできる。
- 9) I—XXVI, p.231, p.127—p.128.

- 10) このレベルの自己描写は註（8）の自己描写と同じではない。後者から前者へ発展してゆく。
- 11) II—XVII, p. 460, p. 43.